

## 第4回実践事例研究会 いじめ問題とスクールカウンセラー

報告：公立中学校・心の教室相談員A（大学院生）  
公立中学校・心の教室相談員B（大学院生）  
私立女子校（中高）・スクールカウンセラーC  
コメント：保原三代子

1999.11.6

（第4回のこの研究会は、いじめ問題に関わるスクールカウンセラーの経験に焦点を当てた。報告者は3人の若いカウンセラーである。3人の報告者には、ベテランの立場にあるとなかなか言えない失敗や戸惑いや無力感等を、飾らずに、そのまま報告して欲しいとお願いした。また、長い間スクールカウンセラーを勤めてこられた保原三代子先生にコメントをお願いした。なお、学校や生徒のプライバシーの保護のために、報告者の氏名・所属等は匿名にした。）

### Aさんの報告

昨年から、心の教室相談員として公立中学校に、週2回午後、勤めている。学校の規模は各学年が3学級、生徒数は300人弱。荒れた雰囲気はなくて、比較的落ち着いた雰囲気の学校である。

いじめに関わることで相談室にやってくる生徒を2つのグループに分けると、一つは、小学校時代からずっといじめられ続け、なかなか学級にとけこめないで傷ついている生徒たちの個人的な来談。もう一つは、ある一つの学級の生徒たちが、どっとやって来て語るいじめ。今回は後者の事例を一つと、個人的につき合いのあった2人の生徒の事例を話しながら、いじめの問題について考えていることや困っていることを話したい。なお、私の経験では、生徒が相談にやってきて話をする時に「いじめ」という言葉を使うことはほとんどない。いじめの内容について、例えば「一番強い人から殴られる」とか、「ウザイって言われてて、学校に行きたくない」とか、「仲良かった人から突然無視されていやな感じがしてる」というように具体的な内容を言うので、「いじめ」という言葉はほとんど出てこない。しかし、ここでは、それらを「いじめ」と捉えて話したい。

「不安状況の落としどころとしてのいじめ」 中学校に入学した直後に、1年生が、クラス対抗のドッジボールをしていた。不安げな人はいないかなあと見て見てい

たら、体が緊張して、顔の表情がこわばっている一人の女子生徒が目に入ってきた。しかし、その子は運動能力が非常に高く、男子が投げるボールを受け取って、力強く投げ返している。他の女子たちは恐くてしょうがないので、その女の子の後ろに逃げこむ。その女の子がボールをとって投げ返すと、周りの女の子たちは「わあ、すごい」と拍手喝采。男の子たちも驚いて感心している。その女の子はずっと、緊張したままだったが、その雰囲気からみると、その女の子は結構受け入れられて、どんどん友だちができていくのではないかと思えた。

ところが、それから1ヶ月後、保健室で私が養護の先生と話しをしていた時に、その子がやってきて、緊張した不安げな雰囲気、「実は私は入学直後からずっといじめられてるんだ」と言う。私が、「ドッジボールの時なんか結構拍手されてたんじゃない？」と聞くと、彼女は「いや、あれは違うんだ。みんなは私を楯にしただけなんだ」と答える。どのように考えてみても、そのようには私には見えなかったが、彼女といろいろ話してみても感じたのは、不安な彼女の中では、全ての記憶が、不安に満ちたものとして歪められていく、あるいは、あの場面をそのように解釈することによって自分の不安の説明がつく、自分の不安状況の落としどころとして用いられることがあるということだった。いじめに関する子どもの訴えを、そのまま「事実」として受け取ってしまうと、その子がかかえている現実を誤解することがあるなと痛感した。

「教室状況の訴え方としてのいじめ」 ある学級の子どもたちがよく相談室に来る。どういう話をしていくかというと、「女の子からウザイと言われて、非常にいやだ」と言う男子、「『筋肉』というあだ名をつけられて、とてもいやだ」と訴える体格のいい男子、「授業中うるさいんですけども、自分だけは授業ちゃんと真剣に受けたいんで、周りの子とちょっと席を離して、授業を一生懸命聞いているんだけど、そういうふうにはやってると、いやがらせをされる」とこぼす女子等々。しかも、話の結末は、

どれも、「もう、あのクラス本当にヤダ」というクラスへの不満と担任への不満。

それをそのまま私の中にしまっておくのもいやなので、相談員をめぐって月1回開かれる会合で教頭先生たちに話したのだが、具体的な動きはない。そこで、その学級の生徒が集まった時に、5、6人の規模で、彼らがグループ・ディスカッションができる空間として相談室を提供することを始めた。そうすると、それぞれが自分の経験を語り始め、生徒同士でうまく話を聞いてもらったり、アドバイスをしたりしている。今のところ、このような空間を保てるようにするというのが私のできる仕事かなと思っている。

「いじめ体験を言葉にすることの難しさ」「ある生徒におもちゃにされている」という訴えが、ある男子生徒からあった。但し、彼の訴え方は極めて「あなた任せ」で、「あとは先生が何とかしてくれるんでしょ、相談員だから」というような姿勢。「それはできない」と伝え、「キミはどういうふう感じてきたの?」「今まではキミはどういうふうに対応してきたの?」と聞いても、答えは単純で、「僕はいやな気持ちしてます」とか「ずっとやらればなしです」といった紋切り型の答しか返ってこない。話が深まっていかない。相手の男子生徒のことは私も知っている。問題児と見られている生徒だが、彼に対して私は何もできていない。やるべきなのかもよくわからない。なるべくその生徒とつき合いたいと思うが、なかなかつき合い切れなところもある。現実には、被害者の男の子となんとか話を深めていくことしかできないなあと思いつつ、果たしてそれでいいのか迷っている。

## Bさんの報告

私は今年の4月から、ある公立中学校に週2日勤務している。

ある日、中学1年生の同じクラスの女子3人組が、「相談したいことがあるので、話を聞いて下さい。よろしくお願ひします」と書いたメモを相談室のポストに入れていった。3人に会って聞いてみると、「クラスの中のある人がとてもいやだ」「先生たちはその子のことをひいきしている」「その子が立ち歩いてても何も言わないのに、他の人が立ち歩くとすぐに怒る」というようなことをまくしたてる。「クラスのある人」というのは、先生方からある障害を疑われている子で、授業中に奇声をあげたり、立ち歩きが多かったりする子である。先生方はその子がいじめられないようにと、いろんな手だてを講じているのだが、そのことを彼女たちは「ひいきだ」と言っているようだ。

そこで、「あなたたちは、ひいきしてるっていうふうにいるんだね」「もう少し同じように対応してくれたらいいと感じるかな?」と私が言うと、しばらく考えて、「いや、あの子はやっぱりちょっと違うと思う。特別なことをするのは、ある程度しょうがないかなあ」と少し思い直す。そのような姿をみて、「彼女たちがこの子のことを悪く言うのは、彼女たち自身が抱えている不安を違う形で表しているんだろうなあ」と、私は感じた。

次に彼女たちは担任に矛先を向ける。「担任の先生がいやだ」「合わないんだ」「自分の都合のいいときには、『ねえこれやって』と猫なで声を使う」「普段は、『何してんの!』という感じですぐ怒鳴ってばかりなんだ」と言う。「担任の先生がそういうことがあるんだね?」と話を聞いていくと、しばらくは激しくまくしたてているものの、一通り言い終えると徐々に落ち着いてくる。

そしてゆっくりと、「でも一番困っているのはそういうことじゃないんだ」と言い始め、「他のクラスの人たちから嫌がらせをされる」「廊下で後ろから『あいつらむかつくよ』って言ったり、他のクラスなのに自分たちのクラスに休み時間に入ってきて、『あいつら!』と言って睨んだりする」「恐くてその人たちのいるクラスの前の廊下を歩けない」「(下校時にその人たちが)玄関に上級生と一緒にたまっているから、恐くて帰れない」と切々と訴えてくる。彼女たちが一番困っているのはこのことだったのだ、とようやく見えてくる。それは保護を特別にうけている子や、わかってくれない担任への攻撃を経て初めて出すことのできたSOSであった。

彼女たちに嫌がらせをする子たちは、異装等で先生方から一番問題視されている子たちだった。彼女たちに「どういうふうにしていったらいいと思うかなあ?」と尋ねると、「とにかく先生たちに、私たちがこういうふうになっていることを分ってもらいたい」と言うので、私から先生たちに状況を伝えることにした。

ところが、先生方に伝えてみると、「あの子たちはちょっと非行傾向の子だから、ああいう子たちから目を付けられるんですよ」「同じ穴のムジナなんですよ」「ツッパリグループの仲間割れみたいなもんですよ」と言って、とりあってくれない。担任の先生は、「あの子たちは掃除もしないし、私は何言っても注意も聞かない、はっきり言ってむかつくんだ」とまで言う。今までは、いじめられている子どもたちに対して、「あの子のことを何とかしよう」と学年全体で動いていくような暖かい先生方だったが、この子たちに対しては驚くほど冷たかった。

先生方の話を聞いていくと、どうも先生たちの中では、「いじめられている子」というのは「とっても弱くてお

となしい子」というイメージ、「先生に対して全面的に『困ってるんだ』と頼ってきて、また先生からの援助を素直に受け入れてくれる子」というステレオタイプができてきているようであった。それに合わない子、ちょっとツッパリ傾向の子だったり、少し活発な子だったりする子が「いじめられているんだ」と申し立てをしても、それはいじめじゃないと見てしまう、そういう構えができていないのではないかと思った。

また、非行傾向のある子の訴えに対して先生方が援助的な態勢がとれないのは、「あの子たちにはむかつくんですよ」という言葉にあるように、今までその子たちの態度によって教師の方が傷ついてきたという歴史があるからだということを強く感じた。他者への不満や攻撃を露わにし、なかなかSOSの出せない彼女たちと、彼女たちの攻撃によって傷つき、援助の糸口を失ってしまう教師たち。この関係の構図を少し動かすことで、「先生たちにわかってもらいたい」という彼女たちの願いをかなえ、教師の傷つきを和らげることができるのではと考え、両者の橋渡しを試みることにした。

そこで私は、その子たちが先生たちがいやがるようなことをせざるを得なかった背景を、いじめとの関係をつけながら話すことによって、少しずつ先生方の、その子たちに対するまなざしを変えていけるように対応した。例えば、「あの子たちは授業にいつも遅刻してくる」と先生が言う時に、「あの子たちの話では、いじめる子たちが廊下でうろうろしているので、恐くて教室に行けず、そのために遅れてしまうらしい」というようなことを話すと、「あ、そういうことで遅刻してくるんだ」「いつもは、遅刻してきたら、『何してんの!』と怒ってばかりいたけど、ちょっと気をつけなきゃね」というような話が出たりした。背景が見えることで、先生方も落ち着いて対応できるようであった。

また、子どもたちにも、「先生にもっと私たちが困っていることをわかってもらいたいという望みがあるなら、あなたたちが困ったときはすぐに先生に言うといいのでは」と伝えた。その子たち自身から先生に「助けてくれ」とアピールをすることで、少し関係が変わるといいなと思ったが、実際には、先生方とのトラブルが未だに残っていて、「あの子たちは何をしてもだめだ」という印象が先生方のなかで残っているような状態である。

私がこの事例を通して考えているのは、①「いじめられている」ということを訴えることは、ある種の子どもたちにとってはとても難しいということ、②非行傾向のある子どもたちから出される「いじめられている!」という訴えは、教師の耳に入りにくいこと、③その背景に

は、教師の側の「傷つき」があり、それをもっと理解する必要があるということ、④教師の傷や誤解を癒し、教師と子どもとの間をつないでいくためには何をしたらいいのかということである。

### Cさんの報告

私が勤めているのは、私立の女子校（中学・高校）。勤め始めたばかりである。

今日は、3つの事例を通して、いじめについて考えていることをお話ししたいと思います。

**A子の事例** 「いじめられている」と訴えて来談した中学1年の女子。最初に話したのは、「信頼している友達に裏切られた」こと。「自分が秘密にしていることを『あなただけ』と打ち明けたのに、それをばらされた。傷ついた」、「あだ名をつけられ、それで呼ばれるのがいや」、「しかし、それがいやと相手に言えない」と言う。小学校の時にもいじめられる経験があったようである。

この子についてはもともと担任の先生から「ちょっと気になりますよね」ということで話をしていた。他の子から批判されたり、からかわれたりすると、頭に血がのぼって奇声を発したりして、パニック状態になることで、気になっていた。

1時間ほどかけてゆっくり話してみて、上述のことが分かったのだが、その後私は「あなたがいやだっていうことを伝えられたら伝えてみてはどうだろうか?」「それも難しいようだったらまた考えましょう」と伝え、彼女が「じゃあ話してみる」という決心をしたところでその日はおしまいにし、「また、何かあったら来てね」という形で送り出した。その後、担任の先生と私が話し合っ、先生に「クラスの状況をちょっと気をつけて見てくださいね」とお願いした。現在は、様子を見ながら、この子の再来談を待っているところである。

この子の相談で私が感じたのは、本人にとってはとても辛いことが起こっていることは分かるが、同時に、周囲の友人たちは「もうちょっと違うつきあい方をしたい」「もうちょっと変わって欲しい」ということを言いたいがために彼女を「からかう」というか、そういう表現をしているのかもしれないということだった。それで、「できたら友達と話し合ってみたらどうかしら」と提案した。

**B子をめぐる事例** ある時、あるクラスの生徒(中1)が、4、5人で来室した。違うクラスのB子について、「その子が嘘をつくのが許せない」「信じられないようなことばかり言う」「ベタベタして近寄ってくるので、とてもウザイ」と語る。いやだから、ある程度距離をおいて付き合いたいのには、B子は侵入してくるといふか、近づ

いて来ると言うことがたまらないと、悪口をさかんに言う。「でも、小学校の時に自分のクラスにもいじめがあって、シカトされている人がいたので、そういうことはしたくない」とも言うので、「じゃあどうしたらいいかね?」と問題を投げかけ、3、4回ぐらい話し合いをした。その中で私が伝えたのは、「もしかして嘘をつくということにも、彼女なりの理由があるかもしれないね。それをちょっと考えてみてほしいんだ」ということ。すると、「ひょっとしたら、目立ちたいのかもしれないね」とか「人にもっとこう、近づいてきてほしいのかもしれないね」と言う子が出てくる。「じゃあ、もしできたらその子と何か、いやだなんて思いながら、何となく疎遠になるよりは、『もうちょっとこうしてみたら』っていうことを少し伝えてあげたらどうなのかな」と提案し、彼女たちが「じゃあ、できたらやってみるけど、できないかもしれない」と納得したところで送り出した。

その後担任の先生と私は話し合いをし、クラスの状況を聞いたりしながら、「クラス全体に自分の気持ちを伝え合うということを働きかけてみたらどうでしょうか?」という提案をした。その提案を先生が受け入れて、そのような働きかけをして下さったが、薬が効き過ぎて、その途端に、彼女たちはB子とケンカをしてしまう。彼女たちが思ってきたことを率直に言ったらしいのだが、B子は泣いてしまう。しかし、その後、B子が手紙に自分の思いを書いて、そこで気持ちの伝え合いはできたというのだが、その後の様子を見ると、どうみても何となくB子は浮いてしまっている。私のところに一人でやってきて、ぬいぐるみをあやつって踊らせて、ちょっといじめてみたりとか、私に踊れと命じたりとか、そういうことをやったりしている。私がけしかけたのがいけなかったのかなあと反省しながら、どうしたらよかったのか、今困っている。

**C子の事例** C子が中2に進級したばかりの4月に、教室で突然泣き出したことをきっかけに、クラス全体で話し合いがもたれた。それまで親友だった人とうまくいけなくなったことで泣き出したらしいことは分かったが、クラス全体の話し合いの中でC子は自分の思いをほとんど言えなかった。担任の先生が「そういう話し合いをもってよかったんだろうか?」と相談にみえた。延々3時間も話し合いをしたらしい。自分の気持ちをうまく言えなかったC子は、腹痛や頭痛を訴えて保健室にやってくるようになる。そこで、私が保健室の先生から紹介されてC子の話を聞くようになった。

C子は、人前で自分の気持ちをうまく言えない感じの子ども。ペースがゆっくりしていて、他の子たちのペー

スに合わないところもある。夏休み後の文化祭でものごとく忙しい時に、級友達に、「何か私ができることあるかしら?」と言ってみたら、「あなたはしなくていい」と言われ、友達とうまくいけなくなってしまう。保護者がその話をC子から聞いて、そう言った生徒にクレームをつける。その生徒は「私たちのケンカにどうして親が出てくるんだ」とC子に文句を言う。それに傷ついたC子が、「クラスに入れない」状態になり、相談室にやってくる。級友たちは、その日のうちに、「相談室に隠れてるんじゃないか、もっと話し合いをしようよ」と、彼女を迎えに来る。級友たちとC子がいる場所に私も立ち会って少し話し合いをしたのだが、C子はなかなか自分の気持ちを言えない。

級友たちは「何を考えてるのかとにかく聞きたい」と言うが、C子はなかなか言えないというせめぎ合いが続く中で、私は級友たちに、「人によって言えるときと言えないときがあったり、言えることと言えないことがあったり、そもそも言うことが苦手な人もいるんじゃないの?コトバだけじゃなくて、表情とか身体のしぐさとか、そういうことでも語るっていうことはできるんじゃないの?」と伝えたが、それを聞いて生徒たちは少し落ちついて、「待ってみよう」と感じてくれたようであった。しかし、その話し合いの後に、C子は学校に来られなくなってしまった。その後も、いろいろなトラブルが生じており、私としては担任の先生と手を組んでなんとかサポートしたいと思っているのだが、大きな難しさを感じている。

**いじめの問題について** 「いじめ」に関係する事例に接していると、「いじめ」というレッテルを貼ってしまうと見えにくくなるのだが、実は、「いじめられる子」と「いじめられる子」の間に大切な人間的交流が起こっていると感じられる場合がある。例えば、「いじめられる子」は、つき合い方のリズムが少々異なる子どもに対して、「もうちょっと違うあり方をしてほしい」「そうしないとつき合うのが難しいよ」とか、あるいは「もうちょっと今までとは違うつき合い方をしたい」「うまくつき合い直そうよ」というような「接近」のメッセージを発しているように感じられる。しかし、そのメッセージの発し方がうまくなくて、「からかう」とか「無視」という、相手には「バカにされる」「いじめられる」「排斥される」としか感じられない表現になっている。「いじめられる子」もまたそのように感じて傷ついている自分を相手にうまく伝えることができない。両者ともに本当は相手に近づきたい気持ちがありながら、相互の誤解が深まり、関係がこじれていくという過程が生じている。

「いじめはダメ」と言っていじめの行為を制止するだけ

ではなく、いじめ的行為に込められているこのような人間的交流への思いを、私はできれば実らせてあげたい。

「いじめる子」と「いじめられる子」の間をつないであげたいと思う。「いじめられる子」であるA子の場合には、「いやだ」と感じていることを相手に伝えてみないかと提案し、B子を「いじめる」級友たちやC子を「いじめる」級友たちには、B子やC子の独特のあり方や動き方への理解と、相手に伝わる表現の仕方の探究を促したのは、そのためである。

しかし、スクールカウンセラーの場合には、相談室に

来てくれる子には関わるができるが、そうでない子にはなかなかできない。「いじめる子」と「いじめられる子」の両者に関わることは難しい。その辺を担任の先生とうまく分担しながら、両者の間をつないでいけたらいいなと思っているが、難しい問題をたくさん抱えている。

(なお、コメントーターの保原三代子先生には、参加者を交えた討論の過程に加わりながらコメントをしていたので、ここでは省略する)